

(4) 実践の考察

○ A校の教師

- ・ 1回目の理科の授業の振り返りでも2回目の理科の授業の振り返りでも、学習過程における主体的な学び、対話的な学び、深い学びについてイメージを持つことができていました。
- ・ 2回目は、さらに、具体的な姿をイメージして記述しています。例えば、観察・実験の結果を分析することについては、主体的な学びにおいて進んで活動できているかについて、より具体的にイメージを持つことができてきています。対話的な学びにおいて児童間の対話だけでなく、教師との対話の部分や事象との対話をイメージして記述しています。このことから、対話的な学びに対しての捉えが広がっていることがうかがえます。
- ・ 観察・実験の結果を分析することに年間を通して取り組む手立てを持って授業改善に臨んだことにより、その他の学習過程における指導のイメージと児童の姿を持つことにつながったと考えます。
- ・ 主体的な学び、対話的な学び、深い学びについて具体性が増して深くイメージするようになってきていることで、授業において、児童の実態に応じて手立てを取ったり、学習内容に応じて手立てを変えたりすることが的確に行われることとなっているためだと考えます。
- ・ 授業を構想する際に事前に的確な手立てを立てたり、授業中の際にもその場に合わせた手立ての微調整を行うことができたりしていることがより深まってきていることに関係していると考えます。

○ B校の教師

- ・ 1回目の理科の授業の振り返りでは、児童の姿をイメージすることができない欄がありました。
- ・ 2回目の理科の授業の振り返りにおいても空欄はあるものの、その数は減っています。
- ・ 自身の年間を通して取り組む手立てを、主体的な学びになっているかどうかで授業改善を図ったことが効果として表れています。
- ・ それぞれの視点に沿って見ると、主体的な学びの姿については、全て記入できているだけでなく、より具体的な姿として記入できています。
- ・ 対話的な学びの姿においては、観察・実験の計画を立案することについて、児童同士が実験方法を交流し合うイメージから、交流した後に児童一人一人がそれぞれに実験方法に対する考えを持つことをイメージしています。
- ・ ここに観察・実験に対して児童がその主体者であるという考えが表れ、具体的な姿として記述されています。
- ・ 主体的な学びとなるように年間を通して取り組む手立てを持って授業改善に臨んだことにより、学習過程全体が主体的な学びとしてイメージするようになってきていることが分かります。
- ・ 授業を構想する発想として、主体的な学びをイメージしているため、学習過程それぞれのつながりを意識した授業づくりが今後取り組まれていくことが考えられます。